

早稲田大学演劇博物館蔵『浄るり今物語』解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久堀, 裕朗 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-033

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	早稲田大学演劇博物館蔵『浄るり今物語』 解題と翻刻
Author	久堀, 裕朗
Citation	文学史研究. 52 卷, p.64-78.
Issue Date	2012-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

早稲田大学演劇博物館蔵『浄るり今物語』解題と翻刻

久堀 裕朗

近年、早稲田大学演劇博物館に寄贈され、目録も刊行された千葉胤男氏旧蔵辻町文庫の中に、『古実今物語』の題名で整理される写本(半紙本全三冊)がある。他に伝存を聞かず、これまで活用されてきた形跡がないものだが、その内容は主に十八世紀半ばから後半にかけての浄瑠璃(一部、歌舞伎)史について記した書で、これまでに知られていない情報を多々含む資料である。そこで、利用の便宜をはかるため、まずここに全文を翻刻して紹介することにした。

翻刻の前に、本書の内容について若干述べておく。本書は序文によると、京都在住の「旦茶房」なる人(未詳)が、若年の頃より五十年余り親しんできた京坂の浄瑠璃・歌舞伎について、老年に至り、往事を回想しつつ書き綴った書である。成立時期については、序に「申弥生中旬」の記載があるだけが、卷三に、

近年東芝居にて麓太夫を頭として一子座取立、給銀なとも下直に
おり極メ出来、さん敷、番銭も下直にして、興行の主人出来て、
段々当りつゞけ、どふそ末長ふ相続ありたし。

という記述があり、これは寛政十一年七月『絵本太功記』の初演以降、翌十二年にかけての、大坂道頓堀東芝居における一連の興行を指すと考えられるので、序の「申弥生」は寛政十二年(一八〇〇)三月と推定される。

現存するのは全三冊(卷一〜三)だが、卷一の表紙に「全部四冊」と墨書されているので、巻四を欠くことがわかる。外題は「浄留利古実今物語」、内題は「浄るり今物語」で、早稲田大学演劇博物館所蔵特別史料目録10『千葉胤男(辻町)文庫 古浄瑠璃・義太夫節篇』には「古実今物語」として登録されているが、本稿では内題の「浄るり今物語」を採用した。各巻に目録があり、巻一には「一、歌の字解端歌浄留理の濫觴」、巻二には「一、浄るり太夫 諸流の伝」、巻三には「一、竹田出羽からくりの事」と記されるが、各巻それぞれ、この目録タイトルには収まりきらない多様な内容を含んでいる。

注目すべき記事は多々あるが、例えば、巻二の、いわゆる「忠臣蔵騒動」の異伝や、竹本座における新作浄瑠璃上演の準備に関する記事、巻三の、大坂宮地の浄瑠璃稽古場における太夫雇用に関する記事や、陸竹座の旗揚げ経緯に関する記事等、興味深いものとして挙げられるだろう。その他、全巻に渡って他書にはない情報を含んでおり、本書は十八世紀半ばから後半にかけての、特に浄瑠璃史について考える上で、看過できない文献であると思われる。

【付記】

資料の翻刻掲載をご許可下さった早稲田大学演劇博物館に感謝申し

上げる。なお本稿は、平成二十三年度科学研究費補助金「淡路人形座と大坂浄瑠璃界の交流に関する研究」による研究成果の一部である。

翻刻凡例

底本には、早稲田大学演劇博物館千葉胤男（辻町）文庫蔵『古実今物語』（14・14(93)）を用い、底本に忠実な翻刻を期したが、読解の便を考慮し、次のような処置を施した。

- 一、底本には段落がないが、内容により適宜改行した。
- 一、漢字は原則として現在通行の字体に改めた。
- 一、底本文に句読点はなく、別に朱による読点を加えられているが、それとは関係なく、新たに本文解釈によって句読点を付した。
- 一、仮名遣いは底本に従い、清濁にも手を加えなかった。
- 一、作品名・書名に『』を、会話部分・段名・引用等に「」を付した。
- 一、底本には「語り」「元ト」等、ルビや捨て仮名に重複が多く見られるが、不要なものは適宜省略した。
- 一、本文中の割注や小字で記された注は、（ ）に括って記した。

浄留理 古実今物語 巻壹（表紙）
狂言

浄るり今物語 巻之一

目録

一、歌の字解

端歌浄留理の濫觴

予若年の比、家業に付て難波津におり／＼下り、彼地に足をとぐむるの間々、竹本豊竹の両芝居を見聞なして、大和、筑前を始として、奇なる音曲に聞惚て、能きは猶なり、あしきにもきらわす、星霜五十年余見聞なしつるに、義太夫節も我も次第におとろへて、出舟する事なく、おり／＼京の芝居や素浄りを聞侍るに、昔には似もやらず、妙音なる衆中も出精なく、我流と値の高直なるをげい道のきぼとなし行やうになり、二度聞事も打やりて、只閑居之友には、近松、並木の正本を枕にして、長夜の伽となすまゝ、有りし事共反古の裏に書つゞり侍りて、此道の好人に見せ給へかしと書林に頼て、愚なる筆にて上下の巻となす事を序となんする事も久しいものや。

申弥生中句 旦茶房 述之

浄留理滑手の雑談

夫音曲の始りは、風木を元として、風の木にあたりて鳴音。元来風は木なり。木は歌なり。木に風が吹当れば、則うとふなり。草木ののびる、塩の満干、皆風木より出たるなり。されは地水火風空なり。

此五つの内に声のあるは風なり。又歌を木なりとかたどる事は、「歌は柯なり」と字注に有り。歌といふ字のへんは、「可」の字式つ重るは、木の枝なり。つくり「欠」といふ字を書は、吹ならす事也。言篇に「風」「蚤」も、みな「うとふ」とよむなり。然は、歌は木也。木は風なり。風は万物の情非情の氣、有情の魂にて、乾坤にひとしく初る事、分明也。此歌、あめつちのひらけざるさきより出来ると有は、天地とともに出来、天地と同じく限り尽せぬ物なり。

是は三十一文字の歌の米歴をしめしたる詞なれど、「うとふ」と有は、今や世にもて遊ぶ音曲、長歌、端歌、浄り、其外にいたる迄も、音曲のしらべなす事、いつと限りは有べからず。天照皇太神宮の岩戸に閉籠給ひし時、神々神衆を奏してうたひ舞給ふを、「あら面白や」と岩戸を少しひらき御覧有けるを、其儘岩戸をとりわけ給へは、とこやみの夜も明て万民の悦び。静御前か吉野勝手明神神前にての舞樂なども、義経公の御身の上を神にいのり給ひしことわざ。伊勢の川崎音頭も、むかし／＼神踊りといふ事もつらははやりしおりのひやう子歌なり。西国順礼道者のふだらくやの歌、熊野ぶしは木やり歌、海辺などにては塩くみ歌、船歌、網引歌、農業などにも田うへ歌、草かり歌、壬生寺の林清が念仏歌、鉢たきの茶筌歌、賤の男が米踏歌、締つむ糸くる夜なべ歌、馬はひん／＼はねたまご歌もいさぎよく「坂はてる／＼」、物もらいの非人が口ずさみ、彼岸七日の与次郎歌、さるまはし、御万歳、念仏に迄歌あれば、何れ家業の口三味線、だまつていぬが和国の風雅、歌で和らくやまとの国なれば、実尤の唱歌ぞかし。道念、鉄念か音頭といふも、元ト都聚楽辺の日用頭、地樂の音頭が名人にて、夫より盆のおどりにもやとわれて、花の都の風流、

外に并ぶ物もなし。

げい子舞子がひく歌も、元トは四条大芝居顔見世発端に、上り役者新古のさかいなく座に付て、見物へ目見へすんで後、八九才計のかげ子、てつぼう袖の着物にて拾人計立出、舞台にておどし時の地歌にて、「きぬ／＼」「山ざき」「なごや帯」など三味線のてうしよく、花やかになうたひ舞たりしを、其比祇園石垣茶屋のかへ子供いこして、客の馳走にうたひしが始にて、夫より段々上達して、二上り、三下り、本でうし、「山うば」の謡に手を付たり、種々の趣向に客もうかれて、東山参会などには決してげい子を呼ねは座敷かしらけて面白からず。此二三拾年此方は、芝居の座付もそこ／＼にて、おどり歌も新作なければ、遊里に身をよせる町むすこ、たいこ持、たいこ医者、色々風流の一曲あみ出し、「滝野か手をつけたの、英治か作じやの」とて、専ら里の一章となるに任せて、「滝川検校か作で、津田先生が手をつけた」などとして、田舎遠國の遊民ももてはやす様になり、「糸のしらべ」「糸のふし」などといふ大本の正本、世に流行する様になり行も、太平のきぼとやいわん。其元トは歌舞妓芝居よりあみ出して一冊六文のはやり歌も、用ゆれば虎の威をかくとやらで、三都遊廓の宝物となりしそめてたし。

浄るりの始りは、『東西故事』に書置し通り、義経公矢はぎの長者か館に滞留の時、長者か姫浄るり御前になれ初給ひて御座有りしおり、其比源氏物語り或はうつば物かたりなどに類して、よみ本にて遊びし事なりし其中にて、やさしき言葉の一品式品程ふり付てうたひかたりて君をなぐさめ奉りしか初にて、「浄るり」といふ題号も此姫の名を

さして呼はりし事なりし。夫より段々一流義多くなりて、江戸にては川東、文弥、京にては表貝又四郎、道具又善太、宇治嘉太夫、宮古路国太夫、山本角太夫、岡本一風、春富士正伝、宮蘭園八など、大坂二而ははりまふし、歌祭文か、義太夫ぶし、豊竹若太夫など、世に秀たる名人、新作浄るりあみ出して世になる。

元ト宮古路国太夫といひし人は、一向宗の去寺之新ぼちに、生れ付て大音にて、しかもこへうつくしくて、角太夫ぶしをけいこしてなぐさみ居られしが、ふと其音声の中より一流をかり出し、世の人称美せしより、寺を一类にゆずりて、「宮古路ぶし、都の国太夫」と名のり、あこの開帳、この万日、四条川原の夕涼、壬生の念仏会など、法会に捨床凡の上にて、二枚三枚のはもの浄るりを語り、大に評判よく、後には門弟も多く出来て、こやがけ芝居願ふて、宮川町の新部子をかへて、『おしゆん伝兵衛道行』『お染久松道行』、又は段物といへば、『いせ日待の山崎与次兵衛』『三国小女郎』などの新作、其比縄手通りに常芝居嘉太夫ぶし一作新浄るりの内など、ふし付かへて語り居られし内、歌内、大和太夫、仲太夫、綱太夫など名人出来て、「京の国太夫ぶし」とてもてはやしたるか、其砌の芝居といふは、むしろやね、むしろがこいにて、表に急度したるかんぱんとともになく、杉原の紙に「お染久松道行、宮古路大和太夫、ワキ宮古路崎太夫、三味線富岡権四郎、相語り申候」と書て、一日に五切ほど、昼後より始り、暮前にはてる事にて、一切八文ツ、にて、さん敷の、高場のといふもなく、太夫五六人、新べ子四五人、三味線引、表木戸二三人、上下拾二三人にて相勤たる芝居なれば、わづかの上りにてても勘定よろしく、松原西洞院天使社内、仏光寺菅大臣、右両所町にて、芝居興

行の最初の所なり。其内法会く、壬生寺狂言の内開帳、万日の庭などへ、小屋かけて興行なしたり。

其比迄は、四条通りに芝居四軒、なわて通りに大和はしつめ二毫間嘉太夫場常芝居、夫より下に式軒、七やぐら享保の比迄有りしか、其後大和ばし詰と、富永町行当り、四条二北かわ西に一軒、南かわ式間、五槽と成りしか、寛保の東大焼後よりなわてはなくなり、四条北かわ式間、南一間、三矢倉となり、宇治嘉太夫はじめ町宮地芝居へおりたり。其砌、鳥獸等見せ物芝居、今の西石垣北かわ角とふふやの所、雨がいる芝居とて、おりには南京糸あやつり、『国性爺』なども興行したり。又去ル寛政焼より北南式間となり、名代も多く町宮地へおりたり。中比には東石垣町ても新芝居出来て、六七年も興行ありしか、是も中絶す。

かくのことく下直の芝居にて数年興行なし居たりしか、其後表に太夫かんぱん出し、「太夫宮古路和歌太夫、ワキ誰」と四人ほと名まへ出したりしか、享保年中より大坂義太夫ぶし段々京へひろまり、『ひらかな盛衰記』興行の時よりどつと京へも評はんまはり、京の好人はわざく見物に行様になり、夫より『菅原』『忠臣くら』ますく評よく、京の聞人で半分はつまる程の事。夫より京の見物の目が高くなり、小屋がけ芝居では見物にも行ぬ様になり、夫から本芝居同前にさへる様になりたり。其比迄は十二三限りにて、夫より年たけ者はか、ゆる事成かたく、内証にて甘の上こしたる者も遣いたり。嘉太夫ぶしも段々すいびして、おりく大坂より竹本豊竹上京して、一切二切ほと興行せしゆへ、見物道具立、表かんぱん、かざり等ぎつはなるに

目が付て、しぜんと物入てけつかふにせねは合点せぬ様になり、子供芝居なども、其昔平名代の芝居はむしろやね、むしろかこひにて、雨ふれは興行ならず、むしろやねの間に合羽を入れて少しの雨はしのぎたり。夫より場のまん中三間四方はとむしろにして、四方へりは取ぶき屋根して、たいがい雨天にても興行なる様に仕たり。夫が段々むしろやねもなくして、惣とりぶき屋根にする様になり、表かんばんも絵かんばん出すやうになり、京の役者計では見物受あしく、大坂竹田出羽などの子供かゝへてする様になると、首ふりて浄るに合す事をいやがり、尤浄る太夫も和歌太夫、綱太夫、喜代太夫、弁仲、春ふじ、出雲など死去して、是ぞといふかたりてもなく、やう／＼(先ノ)一伸、春富士、春太夫のみにて、国太夫芝居に子供名前かんばん上る事はなし。「誰を聞てこふ」「かれがばかおもしろい」と浄るりの事のみにてありしに、天明年中に至りては、子供のちよばかたりにて、あつてものもふても大事ないやうになり、とう／＼今では名前計にて、随分ていねい芝居は暮明に一口式口語らず様になりて、子供の評判する様になりたり。

四条などもむかしと違イ、芝居は建様諸事大坂風になり、舞台もむかしは能ぶたいのごとく、はふ口有、大臣柱も有て、高ぶたいより切まくの所まてほそき所が花道にて、とり手何んでもかの所より出たり。今のまへかわ一面平ぶたいは付舞台といふ物にて、式ノ替りなどはどろ仕合狂言一トまく有て、其時付出したる事也しか、今は常付舞台になり、花道も場の中ほとより向ふさん敷下へ平日有。是むかしは何ぞ趣向の道行狂言にても、何ンぞ此道より出ねはあしき時計にて、常は無之事なりしか、是も平日付る様になり、舞台道具建も一切

／＼南かわは西東の角へ取かたつて、かわり道具も此所より出しけるは、大臣柱何かさしかまふゆへなり。大坂には夫レがなきゆへ、皆車にて引上ケて早速に埒明ゆへ、京も其通りに近火以後舞台をこしらへたり。むかしは盆に大おとりとゆふて、立やく女かた等色々やしゆかうおどりして、見物もおとり計見に行しか、近來は其事もたへたり。表に鼠木戸とて細き入口有りし。是もいわく有事と、勘定場かうし先明て、もふせんたれかけ、「島原かぶき始り／＼」と呼たりしも故実有事にて、二ノ替りには「けいせい何」とげたいをこしらへ、先始にほそきかんはんの上に絵組有て、下外題所は地はり紙青紙にてはり、ごふんにて「げたい、付り、井」等かき出し置、初日一兩日前に惣人形かんばんに仕かへたり。是往古よりかくしきなれと、今の様に京て年中た／＼芝居は得せず、大坂より一座買ふて見する様になり、伊せや尾張や宮島同前に成りしそ無念なり。顔見せは霜月朔日、二ノかわりは正月十五日、盆替りは七月十五日と急度相極り、しぜん一兩日延引は有りし。

丁字屋新四郎芝居興行有りしは凡卅年余、元江戸去日蓮寺の僧にて、佐の川万菊といふ女形になれ初、けんぞくして京へ登り、万菊せわにて芝居興行して、西石垣四条下町に住宅して居られしか、新四郎顔見世取くわて、勘定場に毛ぶとなど敷しかみの火燧に炭山のこつく焼て、未明より出勤して有所へ、元祖沢村宗十郎、京の名物柳山小四郎、つゝいて中村吉右衛門など楽屋入に来るに、何れもかぶり物ぬいで、「毎日／＼お早ふござります」と挨拶して通りし程の威勢、当時の興行人に見せたい物。つゞいて扇や孫八迄は大がいのきくは乱れざりし。霜月顔見世より其座に住、来ル十月かぎりまで

は外芝居へ入かわり住事ならず、「何んの狂言が仕たいけれど、何の役する物がない」と不自由でよかつた物か、今は其狂言の役人か不足すると、何時でも外芝居の者を連に行自由な時節ぞかし。大芝居の立者か「中芝居か勘定よい」とて、極上々吉の身分にて、何ば喰ぬか悲しいとて、浜芝居、宮地芝居へ下り住は、無念な事ではないか。惣て何がいしやとて、其きくの乱ざるにて称美する事なるに、いかに芝居者じやとて、ちつとはたしなみたい事じや。表かんはんの物真根吉祥日のかんばんもなくなり、古人山村か出精してどふやらかふやら芝居式度興行なる様になりて、むかしは女形は女にて勤し所、不埒成事有て一たん芝居はちやうじ被仰付候所、右山村段々相願イ、「男にて女形を似せ仕度候間御免被下」との事、御園済有て、廿年ふりにて又芝居出来たり。今は役しやか金元やら、立者におふては、興行人はあたまあがらず。どふぞむかしの通りにしたい事也。

何分役者高直にて諸色引合ず。むかしは場四十八文、高場六十文、孫さんじき八十文、上棧敷は十八匁、下は拾六匁なりし。ふんどしに錢百文くるく巻て芝居見に行に、焼だうふ人參小さいものにしめのわり子切め喰ふて、大きな顔して場で見られた物が、けしからぬ高直はやらぬもむりならず。錢相場も下直とはいへど、夫よりは上りがつよし。弁当もむかしは小重箱に黒ごまふつた切飯、人数多ければ夫々重箱大きなにつめたり。今のごとくふりさばきめしに成たるは、竹本芝居宝暦年中上京、十ヶ年程興行の内より大坂流になりたり。成程台所かつてよきなり。

芝居の表につみ物も、まんちうせいらう計、むかしよりひいき役者へつんだり。幟立る様になりしは、『夏祭』浄るり大当り、北がわ南

かわ両方一時に出したりしか、南かわは団七山本京四郎、一寸徳兵衛、榊山小四郎、釣船藤川平九郎、北かわは団七に藤岡大吉、一寸二民谷十三郎、釣舟二榊山親小四郎。北かわは不やく者にて春より不当り。南は役者手そろい当りつづけの芝居。北かわに釣舟仕手なく、隠居している親榊山小四郎を段々頼てスケて貰ひしが、もはや八十近い年、久しく休息せし事なれば、口跡も一向わからずして、舞台二出ている計に有しか共、当りつづけの南側、一日おそくかんばん出し、北かわをおいたす仕方と、京中一統にくみか付て、むしろやうに北かわ大当り。其比「きたわいなく」といふはやり歌ありしが、「南をみずに北わいな」と祝義の落首はりて、井籠色々つみ物山のこどく、幟はじめて式本、「じゅらく井筒連中」として持来りたり。夫より段々六七拾本も幟ならべて、五月中比より始、八月一ぱい興行。南かわは卅日程してかわり狂言出せしか、一向其暮迄入りはなし。其六七十本の幟の内、損ぜぬよいの計、大坂竹本芝居へ礼がてら持行しなり。凡卅本計也といひし。夫々万事大坂風になり、京の故実はたへてたり。去ル老人の咄しに、「今の芝居は京も行義かあしくなりたり。昔ははやる芝居は表方木戸口より出入の人も少く、内もひっそり静りて、一ト切幕引と、『よふくく』と誉たり。今は面白き最中にも無遠慮、『うまいく』と大声上て誉、日柄一日木戸往來の出入しげく、扱々不行義になりし」とはなされしも最早廿年も前の事。今は切見にて、一向大道も木戸口も人の往來同し事。浄るり太夫内匠太夫大和掾事いわれしは、「わしも年はよる。めつくりへたに成つたそふな。かたつてゐる内、声がかゝる」といわれしと、今の太夫衆は声がかゝらぬとかゝる様にはづみ付てかたたるゝと、きついちがいなり。浄る

りなどは、取分かん心して聞入っているゆへ、場中に声はかゝらぬはづなり。かぶきなども、名人の仕打、堪にたへて見るゆへの事なり。中村七三郎が『浅間だけ』の若殿、中村吉右衛門が能登守の衣装きせ、沢村前々の宗十郎が油ばかり美濃正九郎など、いやはや感にたへし仕打。其替り幕べると一同に「よいやく」とこへかけたり。尤なる事なり。

浄瑠璃 古実今物語 卷二(表紙)

浄るり今物語 卷二

目録

一、浄るり太夫 諸流の伝

大坂竹本豊竹両座之くわしき本は品々出版有て、『外題年鑑』などは好人の胸中をさぐりたる書にて、其節大に売たり。西といへは竹本、東といへは豊竹にて、ひいき連中諸所に有て、つみ物、幟、天幕、大幕、表かわ引幕、切落し幕、床の下幕、其外みす、棧敷の灯燈いたる迄、連中より持込で、竹本方には、天幕は「いろは連中」、大幕は「天満菅原連中」、豊竹方は「長堀黒金連中」、天幕は「島の内連中」、其外「上町連」「堂島連」「中ノ島連」「堀江連」など、かわり度事、互に威をあらそひて、目をおどろかす事なりし。

元祖は井上播磨ぶしとして道頓堀二而かたり出し、其中堺、尼ヶ崎、

京へも上京有て興行ありし。何といふ新物もなく、二枚三枚のは物上るりにて、今義太夫ふし付の中に「ハリマ」と致し有章付か井上はりまぶし也。其後貞享年中二竹本義太夫此はりまぶしに打込居られしか、元来天王寺村の百姓二而、五郎兵衛とかやいひし人也。ついに播磨か門弟となり、井上義太夫と改名して修行の内、播磨死去致しければ、其跡をつぎ「竹本」と名字改て、其節京都宇治加賀掾芝居は京都根生にて、追々新作上り出し語りけるゆへ、正本所も二条寺町に正本屋九兵衛にて出版致しけるゆへ、其新物を貰ふて大坂にて興行有りし事なり。其節、嘉賀掾方、作者近松門左衛門なれば、妙作のみにて評もよかりしなり。又は山本角太夫ぶしの浄るりにもふし付かへて語りけるか、いまだ五段の続といふ事もなく、やはり端物のみなり。『八島合戦』『酒吞童子』の比より五段つゞきとなり、『出世やつこ』は壹ヶ年も京にて語り居たるとの事也。角太夫ぶしにも『門出八島』『頼光山入り』『頼政蚩合戦』『善光寺供養』是等はつゞき物にて、大当りしたる上りとかや。嘉太夫ぶしも元祖加賀掾死去して、次は富松薩摩掾、富松大和、近竹因幡相続有しか、豊松和泉太夫限りにて断切したり。其比は津六、伊織など、素人に上達の人

有しが、今はとんとたへ果たり。角太夫はいまだ相応に連中有て、一年に式三度は「善光寺」浄るり興行有ぞきとくなれ。

其竹本義太夫の妙音にて、元祖播磨より評判よく、段々章付等いろ／＼趣向有ておもしろく語りこなされしより、自然と一流の様になり、「義太夫ぶし」と大坂一統評判よく、門弟なども段々多くなり、手すり人形遣いなども、阿波地座、又西ノ宮より上達の者かへて相勤させければ、京の嘉太夫ぶし及はぬ様になり、次第にすいび

し、義太夫ふしははん昌する様になりしゆへ、義太夫も相改て筑後
掾と受領なし、門弟には豊竹若太夫、竹本いづみ、いつみ（又は内
匠とも）理太夫、宇治政太夫（後播磨掾となる。始は嘉太夫ふし宇治
か、掾門弟。義太夫ふしに替る）、是等の名人はげみ語りければ、も
はや他所もゆかず、道頓堀西にて常芝居相建、興行日々繁昌の中、
若太夫退座して、東二而又芝居興行有。其節は西の新上り初日に
は東若太夫聞二行、東初日には筑後掾聞に行、至極むつまじき事に
有りしと。上るり床も初は舞たい見付ケ真正面に有りしか、段々道
具建品かわり宜敷なるに付、若太夫工夫にて右之脇へ直したり。尤
音曲の場へ通じもよろしき故の事也。今二而も三番及之時は向ふか
ら紙みすかけたる床のかたち書。京都より作者近松門左衛門かへ
て新作有りしより、段々評もよろしく、筑後掾相果ければ、「跡に三
段目語りは誰」と相談の上、政太夫に極り、「打かへの場なれば大事
の所」とて、「何とぞ能新物あみ出しくれ」と近松氏へ頼二付、「国性
爺合戦」新作出しけるに、古今の当り。四段目「九仙山の段」は竹田
出雲此節より当芝居にくわり候故、からくりにて、和泉太夫出語り。
其後、式度くり返しに人形遣ふて「九仙山」を見せたり。

政太夫、元は紅屋長四郎とて紅染商売人。嘉太夫ふしに打込、其後
大坂へ下り、義太夫ふしに出勤して、次第に評もよく、竹本播磨掾
と受領し功成上、『児源氏』浄るり最中に急死、七月廿四日相果たり。
夫ゆへ『児源氏』は暫く興行して、大切に『八曲形見掛絵』とて、
政太夫事播磨存生に語置し浄るり一トくさりつゝ、太夫八人出語り
にて追善上り候て、評よく、いよく繁昌なしたり。此節、太夫此太
夫（後豊竹に住、筑前掾となる）、京の人にて合羽屋商ひせし人、始

伊太夫といひしか、『行平』『忍ぶ掾の段』、松風和泉太夫、此兵衛伊
太夫二而、評よく、夫より此太夫と改名なしたり。志摩太夫（後島と
書。難波新地出生、八百屋平右衛門といふ）。二代政太夫（大坂じや
こば、魚問屋車屋といふ子息にて、素人の時より「小政くゝ」といか
ひ評よく）、出勤は『児源氏』の前に『大友真鳥』、くりかへしに式
段目切語り、何か大坂出生にて、素人の時より所々にて播磨場をよ
くのみ込語り当し人なれば、いよくひいき多く、『児源氏』には式
段目切たり。錦太夫（始豊竹にて和佐太夫といひし。若太夫門弟に
て、『綿武くゝ』と評よき人。わたやの子息なり）。百合太夫（此太夫
門弟にて、八軒や馬借の子息）。其外、其太夫、柚太夫、友太夫、い
かひ評よし。夫よりくり返し浄るりも有て、新物は「富士見西行」
『二本桜』『菅原』『夏祭』『忠臣蔵』、何れも大当りにて、『忠臣くら』
正本さし出す二付、竹本家法にて本の袋に太夫連名ならべるに、古参
の者を巻頭、巻軸、中、頭脇、軸脇と昔より書ならびなるに、此節、
島太夫、役の事付て、いとま願ふて、『忠臣くら』二段目、六段目切
役場、錦太夫かわりして、島太夫退座なれば、巻頭は此太夫、巻軸
は百合太夫かさし当る番也。さりながら政太夫しる評よく、殊には
りまが名もゆずり受居ル事なり、『二本桜』に二ノ切「友もり場」よ
く、四つめ「狐忠信」大当り、島太夫は「狐」の跡にて一向受けあし
く、『西行』には二ノ切「ゆきまば」五段め「花合戦」、又「菅原」
にて二切「道明寺」「天拝山」評よく、『忠臣くら』は四つめ「はら切
ば」「天川屋」「夏祭」お仲間愁、わかばかしうたん、大坂中をうご
かし、当りつゝ、けの事なれば、巻軸は「政太夫」と有りしゆへ、此
太夫前々の事咄し、「せひならぬ事なれば、政太夫を巻頭に書、巻軸

は百合太夫にして、中へ私を直し下され」と申ければ、竹田出雲はい、出したる事ひかぬ大丈夫の者なれば、「百合太夫は我弟子ゆへ様につのりていふか」とて腹立して、「そんなら百合太夫は隙やる」と有りしゆへ、「百合太夫隙遣はされ升なら、私もお隙被下度」とい、し故、「夫ならそなたも隙やる」とい、が、りになりて、兩人隙出しけり。其前に島太夫退座していず、友太夫、弦太夫も此太夫門弟ゆへ、皆々引連て退座すると、東豊竹よりすく様召か、へ、表にかんはん出し、「此太夫、百合太夫、友太夫、島太夫、鐘太夫、入太夫（後此太夫事）、罷出申候」と有ゆへ受よく、浄るりは『摂州渡辺橋供養』の後大切に『かしこか心中八重霞』出し、太当りし、竹本には内匠太夫浪人して居ければか、へ、竹本大隅掾と受領し、先年退座せし紋太夫再勤、上総太夫、文字太夫、名古屋栞太夫事千賀太夫（内匠弟子）、筆太夫、土佐太夫、此度より出勤、残り居し太夫は、政太夫、錦太夫、柚太夫等也。元来出雲掾が心には、「段々評よき政太夫、事に土地生にてひいきは多し。あれさへ居は外の太夫はいらぬ」といふ大むねにて、巻頭軸の兩人始、皆々隙やりし也。

元来政太夫、播磨が風にてしごく浄るりかたく、「世わ事はいかぬ太夫じや」と聞人の評判なりしゆへ、『夏祭』にお中うばかうれい、しつぽりあてかひしゆへ、大評判にて、「いや世話もなる口ゑらい者しや。一統受よく、夫ゆへかくのごとくにせし」と其節噂したり。いか程の名人にても、役場はまるとはまらぬとにて、高下ある物也。『せいすい記』の時、四段め切「鐘場」、内匠太夫（大和掾事）やあわりとした口中に和らかき場ゆへ大当り、小判ひらふて帰る三重迄か役なり。其跡お筆かくる所より播磨役なりしか、はじめわつさりやあ

わりと語つた跡にて、こつとりとした口中合にてかたりければ、一向せいがつきて聞人なく、「鐘ば」切にて弁当きけてみなく、帰りけり。夫ゆへ播磨もいるく工夫して語りけれど、場かおちついた趣向に、太夫の声かかつたりとしたるゆへ、何ぼても見物聞き、四五日勤て島太夫へ役ゆずりけるに、島太夫は同じくはんなりとしたかたり口に、声もうつしく大音ゆへ、見物聞直して大切までもみな聞しとなり。名人のはりま掾でさへかくの通り、場と声あんばいとつろくせねばならぬ事なり。

昔は太夫か、ゆるに、上切語り、三段目語り、道行けい事語りと、吟味してか、へたり。上切より上達して三切になる者も有りしか、まづすくない物ゆへ、「誰は年よりてこゑも落たれば、上切語りには誰で有ふ」と、素人の内を四五人よせて、まづ大音なる物をおもに召か、へたり。三切あたりは多く二切四切かたりより出世する物なり。大坂の（先）綱太夫出勤の節に、（古）政太夫か夫を聞て頭取にいふ様、申ければ、「あれは一向声がない。上るり語りの声のないは不自由な事。駕かきの足かいたむともし事じや」と笑ふたの事なり。其綱太夫も少声なれど、今の太夫程にはなし。何ぼこへ計てあぢのない浄るりでも、段々出世してからは御用木の出世したにはまねはならぬ物なり。小刀細工は随分まねもてける事なり。其様にして太夫衆か、へたゆへ、一日間に、大序は三切語りか受とりにて、しつぽりうや／＼しく語り、上中多く初心の衆ゆへ、めつたむしやうに子細なくかたり、上切は大音にていききよく、二切は場かむすぶれかゝる趣向ゆへしつとりと、三切はあわれにかなしく、四切ははんなりと、切に成

といさぎよく、五段目はさら／＼と一日のほどきなればかりしゆへ、聞度におもしろく、そして誰のまねの、かれを写すといふ事なかりしゆへ、場の次第と語り口とさら／＼かわりてもたれけなくおもしろかりしが、近年伝法屋染太夫より以来、惣太夫が伝法のまねをするゆへ、ひがら一日わるい伝法よい伝法であへませて、せひかつきて聞にくし。

『菅原』浄るり出来上り、役わりに三切の此太夫、此段は死ル事なくて仕舞ふ趣向なりしか、此太夫つく／＼工夫して出雲にいふ様、
「私役はどふか此度は打付ませぬ。どふそ此切に誰ぞ害人殺してほしい物でござる」といひしゆへ、出雲か「夫は心安い事。だれなりと死なそふが、貴様かたり当てるか」といひければ、此太夫「成程こゝろしてさへ下さるなら、急度語り当てお目にかけませふ」といふゆへ、作りかへて桜丸に腹切らせければ、案のごとく大当り。此「菅原」は作もよし、人形遣イ様もよし。語りては、上切錦太夫よし、二切政太夫勿論、三切は今のこゝとく、四切「寺子屋」も大当り、一々揃ふた出来様、珍しき浄るり也。さしもの「忠臣くら」には、六つめ「勘平場」趣向あしく、其余はよく出来たれとも、此段難有。すべての狂言浄るりともに、けん物かだまされて始はいて、跡のほどきで「さては」と思わする事なるに、此六段め、勘平人形は「舅与市兵衛をてつほうにて打殺した」と思ふて、猪うつたとは知らず。また見物は、「勘平かし」とは殺しはせぬ。定九郎が切た。てつほうは猪に当つたのじや」と承知して見るゆへ、上下のちかい有。又此度の義心の連中、たとへ親が死なふか女房かどふならふか、そこにとんちやくないか浄るりの趣意なるに、舅を打たの、女房を勤奉公、かく迄武運につきたかとは、少しあまい勘平ならずや。後世近松半一、此段を難じて居て、

「どこそでは『忠臣蔵』書なら趣向が有」と兼々工夫して、「忠臣講釈」四つめに、石やの五郎太敵討の助太刀頼れて、「其敵は」とへば「由良の助」、「そなたは」と聞は「九太夫か後家」。「娘とは縁組はする。どふも義心かだぬ」と書たるは、余程半二が作よし。玉にも疵は有内の事そかし。去なから、此「忠臣くら」は、此太夫退座して、跡は政太夫、又は錦太夫、紋太夫語つてもよからず、正本出して廿日計して休みたり。夫ゆへしつこふ今にはやるも、其時とつくり見せぬおかげゆへなり。

其比、東西の芝居、勢ひけしからぬ事にてありし。其浄るりも百日余勤てもかわりの咄しもなく、「余程入りはすき也。何そ新物か出来て有るか、又くり返しか知らぬ」と、床にもてすり人形方にも噂して居る計、何やら一向しれず、其日の昼比に成ると、「果後、惣寄でござる」と頭取か申渡と、「そりやこそ」と表へ出て見ると、かわり新物かんはん出し有。芝居はて、皆々奥へ行、太夫は一ト連、三弦は一ト連、人形連中も一並び、ずいとならひいると、座本竹田氏、手代、作者同座しておくより出、座に付、「扱かわり浄るりさし出す二付、先当浄るりは今日切。扱跡は何にて、三ノ切は誰、一、二、四、上、道行、誰々」と床本一冊渡し、三味線も「誰は何太夫、誰は何」と申渡し、人形も「夫々役わりいつもの通り。明日から衣装ごしらへ。未明よりおより被成」と人形方へも申渡し、太夫方へは「そんちよ何日、初日さし出すつもり。早々ふし付、三弦とけいこなされよ」と申渡し、惣々立別へ帰る。扱あくる日早々より、人形方はいしやうこしらへに集ると、勘定場に大丸や又は三井などから、切レの入たる荷物二三荷持込、手代壱人、使物貳人、付添ふてひかへいる。おくより「夫レ赤

地の此様なもやうの切レか五尺いる。又は黒じゆすか一丈、緋ぢりめん、紫もみ、又は木綿るい、夫々ちよ／＼取に來ル。其度々通ひに付ケ、三四日も毎日／＼相詰もはや宜敷といふ迄勤居て、扱追日初日出すまへに、右に通ひ上させ、すく様払銀高「何十何目、憾ニ受取申候」の濟方。諸買物一統に初日三五日まへに払しまふて興行する芝居、ついにさしとゞふりたる事なし。

扱三弦方は其太夫衆方へいて、「もはやふしも御付被成たか」と尋に二三度も行、いよ／＼よいと三弦にかけて、「そこは夫レではあしく、こふがよからふ。そこは夫レでよけれど、此まへも丁ど其様にひきやつたゆへ、今度はかふがよから」と、太夫がたからさし図にしながら、とくときまると惣げいこ三度。勿論人形かけて、其後大入レかけて見せる事にて有りしか、いつの程からやら、太夫方にとくとふし付して語るきりやうの有太夫なく、師匠にさし図受てすれはよけれど、夫もまけおしみにて、三弦引と相談して、どふやらかうやら間に合す様になりしか、其お師匠様も不存込にて、むりにふし付して笑はれうよりはと、是も鶴沢氏と相談、とふ／＼後には役場の写本を引手に渡し、「よい様に付て」と頼む様になりて、引手が悪ふ引と浄るりか式わりもあしくなり、いやながら三弦に左平治。今では三弦方へ太夫から頼む様になり、太夫をよふしやうと悪ふせうと弦次第。町方けいこ座も太夫方はふはやり、三弦引か大きな顔して浄るりけいこや。それなればとて素浄るり語りて錢には成か、素三弦では行ぬ事なれば、太夫有ての三弦にて、第貳番の役しやが一はな立てのとりあつかい、ひよんな物になりし。一たい三弦引は太夫かたんにて声をとぢるか、思わすせきでも出るか、又は鼻でもかむかの時、間拍子ぬけぬ様に引事

なり。むかしは更なり。竹本大和掾か浄るり、野沢（元祖）喜八相三弦にてありしに、とかく喜八は手がまはり過引たがるゆへ、毎度「引な／＼」としかりても引ゆへ、拍子扇にて三筋の糸を押へていられたといふ咄し有しが、政太夫場『菅原』式切大三重、上の段より菅相丞ゆう／＼と下の手すりへおり給ふ所のふし付、いろ／＼工夫有て、何も物いわず愁の足どりにておりる場なれば、しごくふしあなばい有事にて、此三重の手尔葉、其節一座がおりしとの評はん。左はいへとも、春太夫か「花けいす」道行、富沢藤次郎ふし付、けしからぬ大当り。其さい中に藤次郎大病にて相休み、跡を竹沢甚三郎引しか、是も随分名人なれとも、どふかはだ合あしく、三わりもあしく浄るり聞へたり。「相三味せん」といふ物は各別」と其節評せしか、此春太夫も藤次郎にふし付してもらい、夫にもたれて語るゆへ、俄に引手かわれは上るりも落て聞ゆるぞ悲し。昔の太夫衆に一向其様な事はなく、ない筈の事なり、太夫にもたれて引と三弦にもたれて語るとにて、上下の違イ有。

何もかも世の末にて、作者など近松などの古今の名人は格別、其後の千前軒竹田出雲、竹田外記、並木宗助、松田和文、紀海音、為永太郎兵衛、浅田一鳥、三好松洛、是等か作の時分は、はやるはやらぬは二段にして、よんで見てもさ／＼と浄るりわかり、上の乱は三段目にほとき、二段めの趣向のく／＼りは四段目にさつはりわかり、其内に全たいうれいがちの打しめりくる浄るりには、けい事、ふし事、道行なとはんなりと趣向し、泣別れの三切は四の口に腹か／＼さすぢやりば有て、竹本座『盛衰紀』『鬼一法眼』千前軒の趣向、『西行』『千本』『夏祭』『菅原』『忠臣くら』は小出雲に並木千柳（宗助改名）骨

折た浄るりも、全たい思ひ付の作は誰。文は誰とわかつてこしらへし物故、なづみなくさらくとして見へよし。夫さへ有ルに、(親)吉田文三郎、冠子と名を打、作の手伝イ。『恋女房』迄はおやま人形には足なく、裾より手をさし入てつかいしを、冠子思ひ付にて、重の井人形こしの所をひらけわりて、そこより手を入て遣イ、女形の後かけ見する様になりしは、此上るりよりなり。其後はこし元、てつち迄も、其様になりて、足つかひ入用になりたり。是文三郎か一作なり。段々夫がかふじて、目はにらむ様になり、まゆ毛はさか立様、はらはひよくこく様になりて、道具立もいろくさまく千畳敷のことくとり放し、場の見物のせて左右へ引わるやら、引わる中から御殿のせり上ケ、どふも後には仕様かなふなり、道頓堀の芝居四五軒、証文にのせて銀子のかわりに引渡る様になりしか、千秋楽趣向のはてと見へけり。近年にては近松半二、近松東南、菅専助等なり。半二は昔にもおとらぬ名作にて、世話浄るりも度々新らしく作りかへ、とり分『道風』『講尺』『近江源氏』『菊水巻』『妹背山』『安達原』など古キ尋て新らしく取かへる事名人にて、『道風』は『ひらかな』をひつくりかへし、『妹背山』は『役の行者』を染かへて人の目を驚かせしも、段々相手にしたる三好松洛、竹本三郎兵衛など引退きて、一人して出精も、果は芝居がなくなり、是を新らしく作りかへる趣向も出来ず、其中に病死。おしむへし。

浄瑠璃 古今物語 卷三 (表紙)

浄るり今物語 卷三

目録

一、竹田出羽からくりの事

竹田出雲掾はからくり芝居興行有て、数年道頓堀にて仕似せの店。毎年上京する商唐人も竹田からくりと京の大仏は見ねば置ぬ事にて、極月さし入にからくりを相改、六月中見せ、七月二又改て極月迄興行する事にて、拾文ツ、の追出し。其比は浜がわに芝居ありて、おく行もみしかく、いつにても大人也。其井二伊藤藤出羽掾、是は手妻人形をおもにして見せたり。又石井飛騨掾、亀屋豊後、稲田奎段子などて、からくり芝居浜に有たりけるか、いつも竹田は仕似せにて、外は間々休事有ても竹田計勤いたり。名前は近江掾二而、竹本座座本となりて、子供の内へからくりはゆすり、出雲掾と改て、筑後芝居の後見なし居たり。出雲死去して、惣領跡をつぎ、小出雲と改て、出勤。夫より外記、又近江掾三男にて、出雲と改、同じ出勤。此近江は心の広き男にて、後には出羽も飛騨も我手へ入し、両家の板ふたにて竹田始三間へ自由によかるゝ様になしたり。又其後、中、角両家の歌舞妓芝居も取立て、江戸より三八、升五郎など呼登せ興行せしゆへ、道頓堀かわ六軒の芝居主ゆへ、其時芝居の土地吉左衛門町年寄役も預り、手びろくせしゆへ、近江か通行すると、外芝居木戸迄も床几よりおりて式礼する様な身分。近江か詞かゝる人は浜側にても人受よく成ゆへ、惣中もたれかゝりてたつばいせしも、どふかちと間違出来ると江戸へ下りたり他国へゐたりうろくとなり、とふくはては生玉辺であちきなき身の果、はしめとは違ふて、近江か来

ると人々にげかくるゝ様になりて、人の盛衰あぢきない物なり。豊竹、竹本の一比のはん昌、是が此様なあり様にならふとは夢にも知らず。されども数年の仕にせ、竹田でなふてもからくりといへは、竹田とさへいへは相応にはやり、浄るも竹本義太夫末流の、元祖のと、名目に今でも遣ふは、数年の功なり。どふそ二度よい銀元引出して、常芝居あり度物也。きつとした芝居さへ出来りや、太夫人形も名人も出くるも也。今にてはこしすへた芝居なければ、太夫方も氣まゝにかたり、元祖筑後がふし付をとりなをしたり、門左衛門か骨折た作を抜かへとりかへして語りて、当る事なりやよけれ共さもなく、義太夫ぶしは大坂の名物にて、大坂にて骨折て芝居興行有は、千に一つも当る事も可有事に、江戸へ下りてもかくやら、思ひ入違にて気の毒な物なり。併し此近年東芝居にて麓太夫を頭として一チ座取立、給銀なども下直におり極メ出来、さん數、番錢も下直にして、興行の主入出来て、段々当りつゞけ、どふそ末長ふ相続ありたし。太夫方、人形、三弦方もつよい事いわずと、どふ成と願主の心に随いて相続なさるゝか大坂のきば。太夫衆の中にも、麓内匠、弥太夫、咲太夫にて、随分よし。巴太夫なども、だいふん出精ゆへ、聞よふ成りたれば、段々若手の上達も多くなるべし。何分に給銀高ければ不相続の元トなり。どふそ安売を願ふ事なり。常住当りつゞく事はない筈、当らぬ時もふんどしして退座せむようにするかよし。

中比、陸竹小和泉座とて、一座興行有りし。是は北ノ新地料理茶屋鯉新とやらいふ人、料理商売して、座敷等もきれいにて、大坂の分限者はいふに及はず、田舎の遊人、又は武士かた、時によりては参勤交代のお方なとも、遊参に御立入なさるゝ様になり、御なぐさみに

からくり人形ぜんまいにてこしらへ、御覧ニ奉入、其節、竹本豊竹はん榮の節の事にて、彼芝居ニ而當りし浄るり取組、今有ゆび人形くらいの人形ニ而座敷浄るり数年興行なし居たり。勿論、太夫も人形方も、相応に頼置し事也。其間だく役者衆遊びる事をなげき、どふぞ常芝居取立被下候様に一統頼しより、つい相談出来、北ノ新地桜橋詰の芝居にて明石越後と名まへ出し、『氷室池大内軍記』といふ新作出され候所、相応に繁昌しなければ、壹貳年興行の内、道頓堀へ引こし、陸竹小和泉と名まへ改めて興行。春卿堂不眠といふ遊人述作して、三よつ浄るりを取直し、『女舞劍紅楓』と外題して興行有し所、五つ目「縁切」枳太夫、六つ目「半七内の段」沢太夫、「へ在所生れの此わしと」のさはりぶしけしからず大出来ニ而、京も大坂もいわぬ物なき程の事。此沢太夫はあまじほ伊太夫といふ素人の弟子にて、声はひくけれと功者にて大当り。其後『鎮西八郎弓矢往来』何のかのと五六番も新さく出候内、かんじんの沢太夫死去にて、芝居相続もならず。其後京都へ引こし来り、内匠太夫事大隅と受領して出勤にて、四条北かわ東にて興行ありしかと、さしたる当りもなく、内野新地へ引こし、竹茂都と名字改て半季計興行の内、竹本方より大隅をめしかゝへに來り退座ゆへ、ちや／＼ほちやなつて、其後四条に竹本座出店芝居興行の時、人形遣イは此陸竹座のおもたる人形つかひなりし。其「女舞」の時は、竹本豊竹もおされて、浜に陸竹は置おかぬ論も有りし程の事なりし。今は鯉新方もちいさくなり、鯉作とやははん昌との事なり。

竹本豊竹はん昌之節は、大坂宮地などにけいこばとて、初心の太夫打集り、素浄るりにて、新物本出ルと其儘ふし取に行、二三日けい

こして語りける。素人方も太夫各付て出勤有て、浄るり好は此けいこばにて修行して、其後本座へいてとくと章付して語る事にて、高津、ざま、又はいなり内にて、興行たへす有りし。二間の芝居に太夫入用には、まづ此けいこばの内を誰々、外二とんと素人の声のよい人はまねいて、芝居果てから、場にて出雲始、手代衆、大和、政太夫、錦太夫など、床几に上りて、其人のゑて物、箱を一切語せて、聞て「誰く」とか、へる事ゆへ、出世せふと思ふ人は、まづけいこばへ出勤せし物なり。おりには京都へも申来り、下りし人まゝ有。上総、紋太夫、長門太夫なども、京の人にてかゝられしなり。其代り、何の場にて我流あれば、一向取あへす。わるければ悪いなからに、本道に行さへすれば、早速任れたり。

竹本美濃太夫とて、京にてはかねならした上手、元トは大坂人にて、堀江にて釜商売する人の子にて、釜や嘉十郎とて「釜嘉く」と素人中にても評よく有りしかと、とかく我流ましますゆへ、両家より相談せず。師匠は綿武錦太夫の弟子にて、ふと京へかせきに上京し、竹本若狭といふ人、宮地所々にて芝居興行有て、菅太夫といふを真にして、大坂新古上るりをかたらせ、人形は嘉太夫座、角太夫座の打もらされ、山本小八、藤井勝九郎などにて勤居られしか、寺町かう堂寺内にて『久米仙人』興行の時、此の釜嘉上京して、つかけ芝居へ来り、若狭と引合相談して、「そんなら明日、『久米』の四段目かたつて見やれ」との事にて、其日になりて語せしに、けしからぬ出来様、菅太夫もあやまる程の事。夫より美濃太夫と名前付て、壹ヶ年計あちこちと相勤居れ候内、菅太夫は退座すると、すぐに美の太夫三切、『丹州で、打栗』にて三切、道行、四切にて打わり、五十日の芝居二かわりせし程

の事。夫より『西行』『千本』『菅原』『忠臣くら』、是等はいかう堂て二かわり、六角にて二かわり、三月四月も相勤たり。全体こへよく、三切うづらにて、御幸町二条下ル町に紙店出して、竹本若狭には余程もふけさせし人なりしか、「此所はサハリを入ル、かよいの、爰はかふかよいの」と、大坂正本とは少しツ、違へて語りしゆへ、評判よき人も両座から手は入レす。今ならはとんでかゝゆる人なるに、其節は観世左近太夫か謡の本、メのことく、章何か少しにても違は、素人にてはかぬ様に思ふ程のかつたりとしたせんさくゆへ、拾年あまり京にてはかねならし居られしが、其後病氣づいで、やうく三切計四五数ほど語りけるか、此美濃太夫出勤せねは見物愛あしく、竹本京にて出芝居之時、『菅原』くりかへし、宝暦四年三月初日、三切、式ノ切、政太夫、四切と上切、錦太夫、其上切を此みの太夫か、へて、和佐太夫と錦かむかしの名に改、出勤も、何か病氣最中なれば、やうく十日計語りて休まれけるが、「和佐太夫出せく」と聞人こへのかゝりし程の事、其後死去、京中一統力落したり。其芝居には、元ト太夫、是も妙音にて、一流有かたり人也。喜久太夫、筑前弟子にて、いつても四切語り。信野太夫、文字太夫も出勤なれども、此美濃太夫在勤ほどはやらす。当時釜嘉弟子志賀太夫、元伏見の人にて、大坂竹本座にも住、江戸へも下り、出精して、今は子孫小間物商ひ、よい隠居してぐらし居られけるよし。

江戸へ義太夫ふし出し移りしは、豊竹座新太夫罷下り興行、其前に辰松八郎兵衛といふ人形方も下りて興行、新太夫座は新物大分作り出し、とり分『矢口の渡し』住太夫大当り、作者も去歴々の若旦那一作にて、其後『白石噺』といふは、是は正雪の敵討の世わの事をお

もに取組大入せしか、近年は何もさしたる作もきかず。あの地、作者のこしらへる新作は、昔大坂にて動し浄る内を、いろ／＼つぎ合して作ゆへ、京大坂へ来りては珍しからず。右二番は、当時京大坂の銭になりし也。紀ノ上太郎といふお人の作也。

市の側豊竹此吉座も豊竹わかれにて、入太夫、後時太夫といふ、又此太夫に改名、筑前（此太夫事）門弟にて実心の人、どうそ一ば豊竹株立たしと、明和年中よりくり返し物語り、其後『お染久まつ』作りかへ、大に当り、夫々段々新物追々出されしかと、世の末に成りし義太夫ぶし、此太夫死去有て後たへ果て、芝居は紛り、此吉座といふて、かぶき、人形にかして居けり。

竹本豊竹はん昌せしも、尤、場は拾文ツ、夫から青場、何場と、少しツ、直段も上ケたれと、まづびんほう人は拾文で一日見られたり。京へ出芝居の時にも、ばい上ケて廿文、「夫ても安イ物じや」と、一比ははやりつゞけ、去所の隠居か浄るり好にて、かわり度事に式三度程ツ、見物に行、春の比廿文の場札五拾数ツ、買置、でつち、又は小女郎など、何ぞもつて使に來るために、此札壹枚ツ、ために入てやりければ、先の主人も其札にて見物にやり、小者、小女郎は嬉しかりし也。今ても仕様さへよければ繁昌はする物なれ共、興行人はこけふがどふしやうかいといなく、高給銀とりたがり、めつたやたらに場あらしひ、一座不残三切かたりの心ばへゆへ、相続出来ぬ筈なり。夫レならば、「高給銀程有今度は出来じや」といふ程の語り口もなく、大和掾か『あいこの岩』の「鐘ば」「無間鐘」、是等の様々妙々なる事、ねぶつて見る事ならず。政太夫か『菅原』式切、『安達原』三段め、筑前掾か『菅原』三切、『忠臣蔵』九段目、島太夫か『かしく』

「新やしき」などは、一向評するに論なし。生れ付て大音妙音にて、聞こたへしておもしろふて、今思ひ出せはぞつとする程の事。染太夫からとかく小音にて、利口に語る事か仕にせとなり、三弦なども文蔵か色々趣向して引殺し、素人の初心は一向語られぬ様にこしらへ、とう／＼はやらぬ様に語り引殺したり。芝居で聞て來て、戻つては一口もゆかず。昔のは芝居で聞て帰、好人は語つた物故、サアはやる浄るりは、でつち子供迄も、軒下あるき／＼、うまい所は一口式口かたつた物也。「大音じや」といへば、「大根じや」といわるゝが悲しさに、ある声をむりに押込んで、ちいそふ語る様になりし。夫ゆへはやる芝居も、はやらぬ様にかたりぢめ、今では惣中出語り。首ふる、手をふる、茶をあげる、見とむない事なり。越前掾始、大和なとか出語り、鼻壹寸うごかばこそ、さゆも一口口も呑ぬやあわりむつくりとして行義たしき出かたりと、見た目ではあほうらしい今政太夫。あまり茶を度々呑ゆへ、「又茶ゆふ様」と誉しも、よい口／＼。